

初等科音楽教育におけるイタリアの歌唱表現指導法についての一考察

～音響音声学における歌唱, その美しい響きに注目して～

A Study on Italian Singing Expression Teaching Methods in Elementary Music Education

～From the point of acoustic phonetics in beautiful sounding singing～

瀧明 知恵子¹⁾・木下 紀章²⁾

Chieko TAKIAKI, Noriaki KINOSHITA

Abstract

In this paper, we are inspired by the Italian music education activities that inherit the “singing method”, which can be said to be the traditional art culture that originated in Italy, regarding the singing expression teaching method in elementary music education. In addition, we will focus on “what is singing voice” and “vocal mechanism” in the scientific knowledge of acoustic phonetics, and confirm the importance of “how to lead to singing with beautiful sound”. In addition, we will consider teaching methods based on the new course of study to help create better lessons.

Keywords: Elementary music education, Italian music education, Bell Kant vocalization, Vocalization instruction method, Singing instruction method,

1. はじめに

2020 年度から、小中高の新学習指導要領が順次全面実施されている。知識と技能をいかに獲得していくかという学びから、いかにその知識、技能を活かし学びを深めていくかが重視されるようになってきている。改訂の理念に関わる指摘では、中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の学習指導要領の改善および必要な方策について」¹⁾において「感性を豊かに働かせる」こと、「多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見出す」こと、「直面する変化を柔軟に受け止める」こと、「新たな価値を見出していくこと」、そして「思考」のキーワードが読み取れる。音楽科教育におおに関わる重点事項である。「思考」については2000 年告示の学習指導要領²⁾で音楽科においても示され、意識されるようになり、新学習指導要領において一層重視されるようになってきている。そういった中で、音楽科はどのような資質・能力を育成することができるか、音楽科授業における指導構想など、実践研究を深めていく必要がある。歌唱指導においても「音楽を愛好する心を育てる」について「どのように歌えるようになったか」だけでなく、「どのように歌おうとするか」という思考・判断の中で影響を与える「音楽的な見方、考え方」についても考えが求められている。

1) 奈良学園大学人間教育学部

2) 京都市立芸術大学大学院音楽研究科

瀧明はこれまでイタリアの音楽科教育について調査研究してきた³⁾。ベルカント唱法の発祥地であり脈々と受け継がれている音楽文化に満たされたイタリアにおいて、ローマの幼・小・中学校の一体型学校であるピステッリ校での授業参観・交流授業、およびボローニャ大学、サン・チェチーリア音楽院での研究調査・研究交流を行ってきた。木下はウィーン国立音楽大学大学院ポストグラデュエート声楽科で声楽実技・コレペティ・ドイツ語発音を学び研究を積み重ねるとともに、ローマやパルマ（イタリア）において様々な声楽教師に師事してきた。また、ウィーンのヒンベルク教会、マリアランツェンドルフ教会、などでソリストとして多くのミサや復活祭を務めてきており、伝統的に引き継がれてきた歌唱法について基本的理論及び技能を習得してきた⁴⁾。

これまで歴史的に西欧の音楽文化の中心であったイタリアでは、どのように歌唱・合唱をはじめとする音楽科教育に取り組んでいるのか。中でも、伝統的に引き継がれてきた歌唱法について、イタリアと日本の学校音楽科教育の比較を通して示唆を導き出すことを課題としてきた。

歌唱は、人間に等しく与えられた声帯という楽器で奏でる。人間の声帯は素晴らしい楽器である。歌うための健康管理から楽器作りまでを正しく行えば、美しく響きある歌唱表現の基盤づくりができるのである。

これまで、ローマの公立小・中学校との研究交流において歌唱を始めとする初等科音楽教育において示唆を受けている。さらにボローニャ市を訪れ世界最古といわれるボローニャ大学、およびボローニャ音楽院“ジョバンニ・バッティスタ・マルティーニ”での調査研究を通して考察を深める。

ボローニャ市はイタリア北部に位置し、中世から商業や学術が盛んであり、国内有数の文化都市へと発展している。「創造都市」発祥の地と言われ、ユネスコの「創造都市」ネットワークの音楽分野加盟都市である。ボローニャ大学および、ボローニャ音楽院“ジョバンニ・バッティスタ・マルティーニ”において音楽教育の現状を視察するとともに、現在も研究交流を行っている。

本論文では、初等科音楽教育における歌唱表現指導法について、イタリア発祥の伝統芸術文化と言える「歌声」について、歴史的に脈々と受け継ぐイタリアの音楽教育活動から示唆を受けると共に、音響音声学の知見における「歌声とは」、「響きの仕組み」に注目する。

そういった中で「美しい響きのある歌唱」、「その導き方」について新しい学力観による指導法を考察しながら、開発していくことにより、日本の初等科音楽教育における、より良い授業を創造する機会としていきたい。

2. イタリアの学校教育と音楽

(1) 日本とイタリアの教育制度

イタリアの学校制度は、日本が6-3-3-4制であるのに対し、5-3-*5-*3制である。（*では、専攻によっては修学年数が必ずしもこの通りとは限らない。）学期制度は、主に日本では3学期制だが、イタリアは2学期制をとっており、年度は9月～6月となっている。教育委員会・教育担当として、日本の文部科学省・各都道府県教育委員会にあたるイタリアの行政機関は、教育・大学・研究省（初等～中等教育管轄部-旧「教育省」）（高等教育管轄部-旧「大学・研究省」）である。

日本の義務教育では、小学校6年（7歳～13歳）、中学校3年（13歳～16歳）であるが、イタリアでは、教育体系は大きく2つの課程（サイクル）に分けられている。第1課程には初等学校（Scuola Primaria、5年）と前期中等学校（Scuola Secondaria di Primo Grado、中等学校相当、3年）が、第2課程には後期中等学校（Scuola Secondaria di Secondo Grado、高等学校相当、4～5年）が属している。なお、第2課程の後期中等学校には、文系／理系普通高校、芸術高校、技術学校（専門養成学校）等があり、専攻体系により修学年数が異なる。第1課程は全課程を通じて義務教育、第2課程については最初の2年が義務教育として定められている。ただし、教育権保

護の観点から、「権利・義務」教育という拡大概念が論じられるようになってきており、全ての児童・学生が18歳までに卒業・修了等の資格を得られるよう広く教育の機会均等化を図ることを指針としている。教育政策においては、以前は国が各学年の指導内容を詳細に示していたが、現在は概要を示し、何年生で何を教えるかは各学校の裁量であり、達成度においても各学校が診断するようになっている⁵⁾。

イタリアのカリキュラムにおいては、初等学校は、週当たりの授業時間数には、24時間、27時間、30時間、40時間の4つの選択肢があり、入学手続き時に希望時間数を申請するようになっている。前期中等学校の週当たりの授業時間数には、30時間または36時間（最高40時間まで延長可能）があり、入学手続き時に希望時間数を申請する。1クラスは23名～25名である。通常、文書化された校則や制服はなく、子供の自主性に任されている。

イタリアでは日本の学習指導要領に相当するものとして、教育省（現教育大学研究省）による「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」（幼稚園、小学校、中学校）がある。従来の『学習指導要領（Programmi ministeriali scolastici）』より拘束力の少ない「指針」という呼称を用いることによって、各学校で独自のカリキュラムを編成し、特色ある学校づくりを進めることを奨励したのである。これは、2000年から始まった教育改革「アウトノミーア（教育の自立）」を反映したものであるといわれる。

各学校はこのカリキュラムをベースに運営するが、それ以外に学校自身のカリキュラム（Piani di Offerta Formativa「育成提供プラン」：音楽、演劇、運動活動など）を製作することで、カリキュラムをより豊かにし、特徴を加えている⁶⁾。

3. イタリアの初等科音楽教育 ～ボローニャ大学・ボローニャ音楽院“ジョバンニ・バッティスタ・マルティーニ”との研究交流から～

（1） 実践調査の概要

瀧明はボローニャ大学及び、ボローニャ音楽院“ジョバンニ・バッティスタ・マルティーニ”、と研究交流を行っており、訪問日は2017年9月である。訪問目的は①ボローニャ大学、ボローニャ音楽院の施設・設備（レッスン室、コンサートホール等）の視察、呼吸法・発声法・歌唱指導を中心とする個人レッスンの参観、②呼吸法・発声法・歌唱指導を始めとする音楽科教育についてや教員養成の在り方についての研究交流、資料収集。である。主な対応者はボローニャ大学教育学部バドラート教授（Nicora Badolato）、ボローニャ音楽院ピアノ専攻所属デリウ教授（R. Deriu）である。

（2） 初等科音楽教育の在り方

①音楽科教育における教員養成の在り方

日本では小・中学校共、音楽科教育は義務であるが、イタリアでは中学校（週2時間）のみであり、小学校、高校の音楽教育は義務ではない。ボローニャ大学教育学部バドラート教授（Nicora Badolato）によると、小学校では音楽の専門知識がない教師が教えており、共通で学ぶものは少なくシステム化されておらず、自由度が高い。学校によっては保護者からもっと学ばせて欲しいという要望があり、音楽の加配授業をしているところもある。音楽教諭には学校が費用を出す。基礎力をつける時間は学校差があり、中学まで音楽を聴く機会は少なく、音楽史も中学校で少し学ぶ程度である。

教育制度において、2000年までは大学卒業（3年）と同時に教師になる資格を取得できたが、2000年以降、大学卒業（3年）後、教師になるための2年コースに進む。小学校教育課程では音楽コース60時間は選択であり、受講しない学生もいる。その後の2年研修は、教育学、心理学、合唱、プラス実習であり、有料である。（1年約2,000ユーロ）中学校教育課程では器楽については音楽院3年、あるいはそれに準ずる専門の学びが必要である。

小学校教員採用テストには音楽は含まれておらず、中・高等学校採用試験では、音楽専門のテストがある。2015年に教育関連のモデルができており、大学（教育学部）3年プラス2年、24単位となっている。教員養成3年と専門課程1年目は理論、2年目は実習・インターンとなっている。また、教育現場に入ると、専門のソロ練習をしてきたことが教室では役にたたないといった現状があり、新しい法律で、これまでは本人に任されていた研修を定期的に行うようになっている。

ボローニャ音楽院のデリュ教授は、コンセルヴァトリーオ（国立音楽院）の現況について以下のように語った。

本音楽院では700名中40名が小・中・高校生であり、大半が大学生の比較的大規模の音楽院である。専任の教師は大学生をメインに教えており、外部講師が子ども達を教えている。音楽院の授業は、個人指導、中学音楽専門クラスがあり、小・中学生はそのままのカリキュラムでは無理があるため変更し、成長に応じて行っている。コンセルヴァトリーオは地域の講座ももっており、ソルフェージュ・合唱、オーケストラなど、これまで大人が対象であったが、最近は小さい子ども達も入れている。現在は伝統的に優れた専門的音楽指導を行い、音楽性豊かな学生を育成している音楽院を、学生の将来のためにも大学にしていこうと働きかけているとのことであった。

イタリアでは伝統的に国として音楽教育に力を入れており、クラシック、ジャズ、電子音楽等、子どもの時から学べる音楽教室が多くある。音楽の高等専門学校であるコンセルヴァトリーオは1930年ころ、パリの音楽院をモデルとして創設される。現在は小さいところを含めると70校あり、各国の学生が専門の力を磨くため留学している。

②音楽科教育における指導の在り方

音楽の教育環境公立小学校ではCDデッキ、ピアノなどが整備されていないといった教育環境であり、音楽の授業は機能していない学校が少なくない。関心の高い学校は予算の範囲でワークショップや音楽博物館を計画しており、大学がコーディネーターとなって音楽科授業を行っている。学生が教育プランをつくり、実際に指導したり、コンサートのプロジェクトも計画し実践しているのである。また、オーケストラ部員が生徒と一緒にコンサートを行い、地域のホールで保護者や地域の人々を招き、成果の披露なども行っている。さらに音楽教育学部では教師の指導研修や大学生の無料のコンサートも実施している。

また、指導法については、小学校では低学年から「よく聴かせるようにし、どならせないよう配慮して指導する。『聴く』ということに重点をおいた指導」である。子供たちの地声（胸声）は、特に発声を教えこもうとせず、教師が歌って聴かせ自然に学ばせている。中学では音楽の授業で合唱は行わず、クラブや教室で合唱を楽しんでいる。かつての授業ではオペラや歌唱中心であったが、現在はリコーダーとキーボードが中心になっている。

4. 音響音声学の科学的視点による歌声について

（1）音とは

音の三要素には物理的な要素として「音圧」「基本周波数」「周波数特性」があり、それぞれを「音の高さ」「音の大きさ」「音色」として人々は聴覚で感じとっている。これらの要素を能動的、または受動的にコントロールすることで、ある程度自由に音を作り出すことができる。「基本周波数」すなわち音の高さは周波数の高低によって決まり、音楽では音の高さ（ピッチ）は楽譜上の音符の位置と対応する⁷⁾。

音の「音圧」すなわち大きさは「大きい小さい」という尺度で表され基本的に音のエネルギーと対応する。譜面上ではp（ピアノ）やf（フォルテ）の強弱記号と対応する。

「周波数特性」は他の2つと比べ複雑である。なぜなら基本周波数や音圧と比べて一つの性質では表現できないからである。「明るさ」「綺麗さ」「豊かさ」などの心理的性質を帯びたものであるからである⁸⁾。

また人間の聞くことのできる音の範囲を可聴限界周波数と言い、この可聴限界周波数は一般的には「20 Hz～20,000 Hz」とされている。しかし加齢により高周波数が聞こえづらくなることがあると言われている。聴覚では音圧が大きくなると、人は「音が大きい」と認識する。音圧は周波数の振幅の大きさによって決まる。音圧を数値で表す場合、単位として [dB] を用いデシベルと読む⁹⁾。

次に人間の声の音色はどのように作られているのか。まず基本の周波数の音に対して、その周波数の2倍、3倍と「倍音」という音を重ねて複数の純音からなる複合音で構成される。この倍音がどのような構成でどのくらいの比率でできているかによって音色の「違い」というものが生まれるのである¹⁰⁾。

大辞林3版によると、倍音とは波形が正弦関数で与えられる進行波。波動を解析的に取り扱う場合の基本形と記載されている。

5. 歌声が響く仕組み

(1) 咽頭音源

咽頭音源とは、肺からの気流によって声帯が振動する時に生成される音のことを指す。声道共鳴器が声道の重要な要因の一つであると同様に、咽頭音源は、声質においても非常に重要な役割を果たす。声質に関連する咽頭音源の特微量を表現するならば、音源について3つの次元を定義する必要がある。すなわち基本周波数、振幅、およびスペクトルである。わかりやすく音響的でない述語を使うなら、ピッチ、ラウドネス、声質特微量である。発声周波数は声帯の振動周波数と同じである。発声のラウドネスは声門下圧によって制御され、声門下圧は呼吸器官により制御される。音源における声質の特微量もまた、声帯振動の特性に依存するが、これは喉頭筋と声門下圧の両者に依存するのである¹¹⁾。

(2) 声区

一般的に受け入れられている明確な定義は存在しないが Hollien (1974) は、声区を次のように定義した。声区は完全に咽頭における事象である。声区とは、ほぼ同一の声質で発声される、連続する声の周波数の領域または列のことで、声の基本周波数においては少々の重複が生ずるもの、実際の声区の定義は、これを裏づける知覚的、音響的、生理的、および空気力学的根拠に依存すべきであるといわれている⁹⁾。

声を出す時には左右の声帯が喉頭の筋肉の働きで中央に寄ってくる。これを声帯の内転という。同時に肺からは息を吐こうとする運動、すなわち呼気が起こる。左右の声帯の間の隙間を声門というが、そこに肺から気管を通して呼気が昇ってくると、声帯の内転によって狭くなった声門を呼気がすり抜けるようにして上方、つまり口の方に流れ出る。すると呼気が狭いところを流れ出るため声帯は内側に引き込まれて（ベルヌーイの法則による）声門が完全に閉じ、呼気の流れは一旦止まる。しかし肺からの呼気の圧力が高まってくると、声門は押し広げられ、ふたたび呼気が声門から流れ出る。そうすると、また声帯が内側に引き込まれ声門が閉じることになり、結局声門が、頻回に繰り返し開閉してその都度少量の空気が出ていく。このように声門が素早く繰り返し開閉する現象が声帯振動と呼ばれるわけである。こうした声帯振動によって声門のすぐ上のところで空気の密度に濃淡ができ、これがまわりの空気を振動させ音波が発生するということになる。ハモニカをはじめリードを持つ管楽器を吹く時には、その楽器のリードを、吹く息で開閉させてまわりの空気を振動させているが、これと同じように、喉頭は声帯をリードとする管楽器ということになる。声帯が規則的に振動してよい声ができるためには、左右の声帯が十分中央に寄ること、声帯が柔らかく弾力に富むこと、とくに振動する縁の部分が滑らかで湿っていることなどが重要である。ここで作られる音の性質としては、一秒間に何回声帯が振動するかによって声の高さが決まり（振動数が多いと声が高くなる）また出てくる音波の振幅（ふれ幅）が声の強さに相当する。また音波の性質（波の形や雑音の混じり方）

によって声の音色が左右される。このように、通常の発声あるいは食道発声のいずれについても、声をつくるためには空気の流れが必要であり、また音源となるような場所（声帯がある場合は声門、食道発声では仮声門）があり、そこでかなり規則的な振動が起こらなければならない、という大原則がある。このような振動が起こるためには音源の部分が必要に応じて狭くなり、しかもその壁の部分が十分柔らかく、あまり分厚くない方が望ましい。（分厚いと振動部分の質量が大きくなるわけで振動しにくくなる）声門と仮声帯とは性質が異なるのである¹²⁾。

（3）声楽的美しい響きの伝え方

声楽の領域ではベルカントという言葉がある。イタリア語であり、もともと美しい（自然な）歌と日本語で訳されたりするが、ベルカントにおいて重要な音色の特徴というものがある。それは響きが「明るい」「丸い」「柔らかい」という3つの特徴である。これを低音から高音までの音域で歌うことが基本であり、一つでも欠けてしまうとベルカントとは言えなくなる。クラシックの声楽家はこれを基に日々訓練している。

もう一つ、ベルカントと同じく重要な要素がレガート唱法である。レガートとはイタリア語であるが、日本語では「結ぶ」、「繋ぐ」などと訳すが、音楽用語では音と音を滑らかに繋ぐという意味で使われる。声楽でレガートは有声子音、無声子音があり高度な技術の一つである。歌には歌詞があり、言葉を発するので母音だけでなく多くの子音も同時に発音しなければならない。また p、k、t の無声子音があることは、よりレガートで歌うことを困難にしている。木下はウィーンに留学中、多くの声楽教師のレッスンを聴講し、受講してきた。また声楽の教師と併用して、コレペティのレッスンも数多く受講した。日本では音楽教師の一言で全てがまとめられるがヨーロッパでは主に2つの教師に分けられる。それは声楽の教師とコレペティの教師である。この2種類の教師はどちらも重要であり、片方が足りなくても成立しない。声楽教師は主に声の基礎を教え、体の使い方や息のバランス、姿勢なども教える。一方、コレペティはピアノ伴奏をしながら、主に作品の解説を行ったり、音楽作りを教えるのである。コレペティの教師は声楽教師で補えない箇所を教育している。日本の教育現場では音楽教師がそのどちらをも担っている。

木下はイタリアでのレッスン内容を日本において声楽レッスン受講者に伝授し訓練を行っている。とりわけ、レガート唱法に有効であり、反復して練習を行うフレーズを提示する。

イタリア語では『い』の母音の響きが歌う際に最も重要である、と一般的に教えられるが、その「い」と「お」の響きを無理なく美しく歌うために、発声練習などで組み合わせて訓練する。ドレミの音階で3度、5度、9度と歌い、その後アルペッジョで5度、10度、13度と徐々に音域を広げていく。この時ベルカントの基本の響きは「明るく」「やわらく」「丸く」を意識して歌う。

ここで歌唱指導の際に気をつけなければならないことについて、これまで修得してきた中から、特に重要な6点を以下に示す。

①音程が低い時の響きも意識する。

人それぞれであるが、中音域は出しやすいというのが一般的である。高音と低音は個人差があり、均等に出すことが困難になる。特に音程が低くなると歌声の響きのポジションが落ちてしまい、その結果、音の響きが暗くなったり音程が低くなってしまう可能性がある。

②声になる瞬間の息のエネルギーを意識する。

ベルカントで歌う際、吸気から呼気に移動する際の「歌う」という歌声のエネルギーを常にオン状態にしておかないと響きを均等に保って歌うことができなくなる。そのために体の『歌う』という準備が大切である。

③決して声を喉で押さないように意識する。

声を喉で押してしまうと、レガート唱法が途切れてしまうだけでなく、最も気をつけないといけないことは、喉

を痛めてしまう可能性があるということである。

④柔らかい息で滑らかに次の音へ移行することを意識する。

ベルカントの基本である、できるだけ柔らかい音で歌うためには、息もできるだけ硬くならないように気をつけなければいけない。しかし②で述べた声のエネルギーは失ってはいけないので、バランスは人によって違う。

⑤下降音階の時、できるだけ響きが暗くならないように意識する。

上行音階の際、初学者は気をつけて上がっていくが、無事に高音を出したという気の緩みから下降音階ではエネルギー不足になり響きが落ちて、さらには音程が下がり息が最後まで続かないということになる恐れがある。

⑥ブレスの時に重心が上がらないように意識する。

長い曲を歌ってくると歌うことに必死になり、ブレスの取り方が雑になり、歌のパフォーマンスも落ちてしまう。できるだけ最後まで集中して歌い切れるだけのブレスを取りたい¹³⁾。

(4) 初等音楽教育における美しい響きの伝え方の導入について

幼稚園や保育園などで歌う楽曲選びや教育システムというのは各幼稚園、保育園ごとに、千差万別でありレベルも様々である。またピアノを個人で習っている児童もいて彼らを一括りにして教育しようすることは困難である。そこで、初等科音楽教育における「美しい響きのある発声」の指導法について考察する。

三省堂 大辞林第三版によると、「響きとは」について、(1)音や声が広く周囲に伝わって聞こえること。また、その音や声。(2)音が物にぶつかり、跳ね返ること。(3)発音体が振動をやめた後まで残る音。残響。余韻。(4)その音を聞いた時の感じ。(5)伝わってくる振動。と記されている。先に述べた、人間の聞こえる周波数というものはおおよそ 20 Hz から 20,200 Hz と言われている。初等科音楽教育では、まず3つの響きを注目していく。

＜児童への問いかけ＞

- 1 響きとは何か？
- 2 美しい響きとは何か？
- 3 美しい響きはどんなものがあるのか？

新学習指導要領の音楽科指導における「音楽経験と思考」について、実践研究を深めていくために、以下のよう
な指導を行っていく。

例1) 響きってなんだろう？

＜予想される意見＞

お寺の鐘、船の汽笛、ピアノの音色、トンネルの中、やまびこ、など

例2) 美しい響きはどういうことだろう？

＜予想される意見＞

聴き心地がいい、心の中に留まる、癒される、など

例3) 美しいものの響きはどんなものがある？

＜予想される意見＞

楽器の音色、人間の声、川のせせらぎ、鐘の音、など

以上の3つを考えさせ興味関心を持たせた上で、「美しい響きとはどのようなものなのか」という理解を深めさせていく。

それぞれ育つ環境は十人十色である。元気に歌うことが美しいという児童もいれば、丁寧に歌うことが美しいという児童もいるだろう。実際「美しい」にもいろいろあり、その様々な美しいをまずは児童に自分で考えさせる。そして教師はたくさんの「美しい」を児童と一緒に考えて考える。

「美しい」(ポジティブ)を表現するにあたり、反対語「醜い」(ネガティブ)表現についても考えさせ、さらに思考の幅を広げたい。

＜予想される意見＞

ポジティブ…歓喜、嬉しい、楽しい、希望、等

ネガティブ…苦痛、苦悩、悲劇、逃亡、等

どちらにも取れる表現…ワクワク、ドキドキ、ソワソワ、等

以上を考えさせ、児童たちと共通認識として確認し、それを基に歌うことにおいて「美しい響きとはどのようなものであり、そしてその響きはどのようにして作るのか。」という課題を初等教育から成長段階に応じて指導していくことにより芸術的美意識を育てていく。芸術的美意識は人格形成において重要な役割を果たす一つと考えられる。

6. 考察とまとめ

2018年10月より、芸術強化に関わる事務が文部科学省から文化庁に移管された。それによって、乳幼児、児童・生徒から高齢者にいたるまで、あらゆる世代の文化・芸術活動・教育に対して、文化庁が支援し推進することとなった。音楽教育においてこれまで以上に生涯にわたっての学びという視点が大切になるとともに、音楽教育実践の新たな基礎づくりが強く求められている。

2020年度から小中高の新学習指導要領¹⁴⁾が順次全面実施され、知識と技能だけでなく、思考力・判断力・表現力の育成を掲げ「主体的・対話的で深い学び」による授業が進められる。新教育課程では、知っていることを活用して、「何ができるようになるか」を意識した活動が求められている。各教科で育成されるもの、教科等ならではの見方・考え方など教科の本質にかかわるものや、教科等固有の個別の知識やスキルに関するもの、といった視点が重視されているのである。「教科等の本質にかかわるもの」を考えていくとき、子どもたちが「身に着けているもの」を土台に「何を、どのように身に着けるか」の研究実践を深めていく契機となっている。

この度、ボローニャ大学およびボローニャ音楽院“ジョバンニ・パッティスタ・マルティーニ”での調査研究から、音楽教育における教員養成や初等科音楽教育の在り方をはじめ、学校外教育との連携など社会全体で組織的、計画的に行われている伝統文化継承の取り組みから、示唆を導き出すことができた。

初等科音楽教育では、基本的な歌唱指導については低学年から「よく聴かせるようにし、どならせないよう配慮して指導している。『聴く』ということに重点をおいた指導」を中心に行っており、子供たちの地声(胸声)は、特に発声を教えこもうとせず、教師が歌って聴かせ自然に学ばせている。また、オペラプロジェクトの活用をはじめ音楽専門家の指導を直接受けるなど、社会と連携した教育活動を推進し学びの場としている。

ボローニャ市では音楽教育を振興しており、「子供と音楽」「社会と音楽」をつなげることに取り組み、関係する人々が同じ使命をもって活動している。「音楽を身近に感じ味わうこと」を学校教育・社会教育の共通のねらいとしているのである。例えばオペラプロジェクト¹⁵⁾では、多くの保護者が子どもに心豊かな体験をさせることを重要視している。子どもたちは、音楽専門家に学び、オペラ歌手とともに歌い、ステージ体験も行う。保護者は熱心に

子どもたちの取り組みに寄り添い、仕上げのオペラ上演では子供の出演するオペラを鑑賞し感動を共有する。地域の専門機関・学校・保護者が連携してより良い教育を行うことを目指す場でもあるのだ。こういった取り組みから、子どもたちの歌唱法をはじめとした音楽性が育まれ、イタリアの偉大な文化遺産はしっかり地域に根付き、子どもたちに引き継がれているのである。

木下は7年間にわたるイタリアやオーストリアでのベル・カント唱法をはじめとした唱法の研究や演習において、基本的な導き方や配慮すべき事項を明示している。これらは、日本の初等科音楽教育における系統的な指導法の開発に活用していけるものである。

本論文では、音響音声学の科学的視点による歌声について、その美しい響きに注目し考察した。

「音とは何か」「歌声が響く仕組み」の理解を深めることにより、成長に応じた歌声を生み出す楽器の磨き方、練習方法、その積み上げが如何に大切かが認識できるのである。一人ひとりの人間が持つ声帯は素晴らしい楽器である。歌うための健康管理から楽器作りまで子ども達の成長に対応し系統的に行っていくことで、美しく響きある歌唱表現の基盤づくりができる。

昨今、音楽療法の分野においても美しい音と人間の落ち着く周波数の関連性が考えられているところである¹⁶⁾。そういった中においても、心に響く曲や音色は、声を出して音を共鳴させることで、さらに落ち着いた気分が広がるのである。音楽療法の分野において研究が深められているが、音楽科教育においても児童の情緒を安定させ豊かなものにする「美しい響きある歌声」づくりの系統的指導法の重要性に鑑み、学校教育の中で、計画的に進めるための一助としたい。

一般にオペラだけでなく、様々な歌唱曲においてベルカント唱法が最もそれにふさわしいものと考えられている。しかしながら、ごく自然に楽な息のエネルギーで歌い、力づくでなく、身体の働きを自由することによって、その人のもつ本来の声のクオリティと音楽を正しく表現していくという歌唱法は自分のものにするのにはかなりの期間、忍耐が必要である。声楽を専門的に学ぶ時期は、イタリアにおいて声変わりを終えた頃とされてきたが、修得に長い年月を要することから、小学校低学年より成長に応じて、その基礎・基本を導入することは可能であり、それぞれの子供たちの可能性を広げていくことに繋がるのである。

本文中の「美しい響きの伝え方」の中にあるように、新学習指導要領における「音楽経験と思考」について、学習者が疑問を抱き、発見を感じたりするきっかけがなければ思考は始まらない。学習者が音や音楽に働きかけ、音楽経験の中で主体的に問題解決を図る場面で思考は働くのである。幼少期に様々な経験することにより、耳（聴覚）だけでなく目（視覚）や鼻（嗅覚）舌（味覚）そして触（触覚）を発達させ、その中から子供達は何かを感じ取り、どういう響きが美しいのか、また心地がいいのかということを自然に見つけ出していくプロセスの中で、イタリア発祥であるベルカント唱法の基本を伝えることが重要であり、より美しい響きに対する興味・関心へと導くことができるのである。

2015年の中央教育審議会「教育課程企画特別部会 論点整理」¹⁷⁾の音楽科では「感性を働かせ他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてその良さや価値観を考えたりしていくこと」が明記されている。例えば、歌唱指導において、教師の一方的な一斉指導での展開でなく児童の思考を促す活動を取り入れる。「どうして」「どうする」「どうなる」といった問いかけを行い、自分たちの活動を言語化することにより、その活動を明確化させるのである。そういった中で、音楽科において「技能」だけでなく「思考・判断」を育み、「主体的・対話的で深い学び」へと導き、児童の成長をより促すことに繋がるのである。

新学習指導要領が提示され、教育改革が進められている。グローバル化した21世紀には、情報化、テクノロジーの進歩が進めば進むほど、「人間にしかできないことは何か」が重要になると言える。音楽は一生の友であり、知

れば知るほど楽しみが深くなり、生涯学習につながっていくものである。イタリア発祥の「ベルカント唱法」は時代を超え、国境を超え継承されてきた発声法である。専門教育で学ぶ者だけでなく、公教育の音楽教育活動において、すべての人間に与えられている楽器磨き「美しい響きの歌唱」に導く指導の確立は、大変意義のあることである。

今後、更新とその道筋をどのように構築するか、新しい学力観に対して音楽科教育の在り方を、イタリアの学校外教育との連携等にも示唆を得ながら、音楽科改善の視点から、さらなる充実をめざさねばと考える。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省「中央教育審議会の答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の学習指導要領の改善および必要な方策について』」1917年
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）」2017年
- 3) 瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ ～歌唱活動に注目して～ 教育フォーラム 56号 特集＜アクティブラーニングとは何か＞金子書房 2015、
瀧明知恵子「イタリアの道德教育と学習者の評価 ～イタリアの学校教育実地調査から～」指導と評価 2015 図書文化、
瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅡ～創造性・主体性の育みを視点として～」教育フォーラム 58号特集＜主体的能動的な学習ーアクティブラーニングの精神を生かす＞金子書房 2016 他
- 4) 木下紀章・西海良平「運動学的ベルカント唱法～身体操作と音楽表現のメソッド」2019、
木下紀章・瀧明知恵子「初等科・中等科音楽教育のベル・カント発声法における一考察」武庫川女子大学院教育学研究論集 2019 他
- 5) 外務省 諸外国・地域の学校情報 国・地域の詳細情報（イタリア共和国学校体系）2017
- 6) 「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」2012年9月版教育省（イタリア）
- 7) 岩宮眞一郎「音楽の科学」p32. ナツメ社 2009
- 8) 岩宮眞一郎「音楽の科学」p32 ～音色の性質は複雑より～ ナツメ社 2009
- 9) 同上 p26 ～周波数により変わる音の聞こえ方～
- 10) 同上 p16.
- 11) ヨハン・スンドベリ「歌声の科学」p50 榊原健一 監訳 東京電機大学出版局 2007
- 12) 同上 p50-51
- 13) 木下紀章・西海良平「運動学的ベルカント唱法～身体操作と音楽表現のメソッド」2019 音響音声学入門 大修館書店 1976
- 14) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）」2017年
- 15) 「Scuola In Canto」I nostri progetti (Scuola in Canto Ars In Canto In Cantando) 2014 Cecilia Gobbi、
Nunzia Nigro (DI GEORGES BIZET)「CARMEN」CURCI (Cecilia GOBBI、TEATRO DELL OPERA DL ROMA) 2010
- 16) 和合治久「心と体が安らぐ周波数「528Hz」CDブック」2013 イーストプレス 中央精版印刷株式会社
- 17) 文部科学省「中央教育審議会 教育課程企画特別部会 論点整理」2015年 p.50
- 18) フレデリック・フースラー、イヴォンヌ・ロッド＝マーリング＝著「Singen」須永義雄、大熊文子＝訳 1991 音楽之友社、コーネリウス

- 19) L.リード「ベル・カント唱法ーその原理と実践」渡部東吾（翻訳）音楽之友社 1986 他
- 20) 一色信彦「声の不思議 診察室からのアプローチ」中山書店 2006
- 21) 『和合治久』監修 ACOON HIBINO「もやもやがスーッと消える 528Hz CD ブック」© 中央精版印刷株式会社 2017
- 22) 米山文明「声の呼吸法」平凡社 2003
- 23) P.ラディフォギット「音響音声学入門」佐久間章（訳）大修館書店 1976
- 24) 高橋純「歌い手のフォルマントについての考察」京都市立芸術大学音楽学部・大学院研究紀要 HLMONIA No.47 2016
- 25) John Warrack and Ewan West, “The Oxford Dictionary of Opera”, Oxford Univ. Press (ISBN 0-1986-9164-5)
- 26) 外務省ウェブサイト (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/italy/data.html>)（更新日：2021 年）
- 27) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編』2018